

# 新城市民病院での地域研修

名古屋第一赤十字病院 研修医

実習期間 2017年7月10日～8月6日

本研修は私にとって今までの考えを覆すような出来事の連続でした。同じ物事でも違った角度から見ることで全く別物になるということを教えていただき、非常に有意義なものでした。新しい発見は多くあったのですが、ここではそのいくつかを紹介させていただきます。

訪問看護へ同行させていただいた時の事、訪れた自宅に、その日訪問看護が来るという情報を知った別の患者さんの家族の方が、新たに訪問看護利用を考えているということで訪ねてきました。患者家族同士分かり合うところが多いようでとても話に花が咲いておりました。どちらの家族も患者は夫で介護者は妻という構図でしたが、その会話している姿はまるで母親が自分の子供の事を嬉しそうに話している姿そのものでした。その姿を見て私はとても考えさせられるものがありました。普段、自分の研修病院は急性期病院であるため、まさに急性期といった患者さんがほとんどを占めております。当直や入院中の患者さんを診る際にはどうして病気自体に先に目が行ってしまいます。特に救急車で搬送されてきた患者さんを診る際にはほとんどの場合、何とか生存させようとするあまり血圧などのバイタルや検査結果とにらめっこ状態になってしまうことがあります。搬送されてきた患者さんがどういった人でどういう状況で生活していて、どのような思いで家族が介抱しているかということはどうしても二の次になってしまいます。時にはもともと意思疎通を図ることができない方や高度な認知症があり自分が誰なのかすら分からなくなってしまうような方を診ることもあります。その時に毎回、私は自問自答してしまいます。「この人は本当に生きていたいと思っているのだろうか。」と。命を救うために医者になりたいと思ってこの仕事に就いたが、果たしてそれがすべて正義なのかと。私はこの疑問が浮かぶ度に自問自答し、答えがでないまま救命を行っておりました。しかし、今回の訪問看護で少しだけヒントをもらった気がしました。それは、例え本人が本当に生きていたいと思っているのかわからない状態でも、その人を支える家族、友人のために行うべき救命があるのだということでした。

二つ目の発見としては、最もお世話になった上級医の先生方に関してです。自分の研修病院でも総合診療科はあるのですが、はっきり言って上手く機能していない状況です。総合診療科の専門の先生がいらっしゃる曜日は科として成り立っており、研修医にとっても学ぶことの多い時間ではありますが、それ以外の日に関してはただ、患者をそれぞれの科に振り分けるだけの‘振り分け科’にすぎません。私は今まで総合診療科に対してはそのイメージしかなかったのですが、新城市民病院ではそれはまるで違う姿がありました。当院の総診の先生方はまさに、どんな疾患でも診ることができ、どんな状況にも臨機応変に対応できる医者であり、それは私が常々理想に描いていた医師像でした。自分の専門科から少し外れたら他に回すのではなく、自分で一人の患者を総合的に診ることができるというのは本来の医師のあるべき姿だと思います。私ももっと幅広くかつ深く知識、技術をつけどんな状況にも臨機応変に対応できより患者さんにとって利益になる医療を提供できる医師になりたいと強く思いました。

コメディカルの方々、事務の方々、関わってくださった患者さん方には非常に感謝しております。お世辞ではなくみなさん心の温かい人達ばかりでした。それはやはり新城の豊かな自然がそうさせてくれているのかなとも思いました。

みなさん本当に、楽しく、学びの多い四週間をありがとうございました。